☆年間第１１主日（６月１８日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読（出エジプト記　19 章 2-6a 節）

その日、イスラエルの人々はレフィディムを出発して、シナイの荒れ野に着き、荒れ野に天幕を張った。イスラエルは、そこで、山に向かって宿営した。モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。「ヤコブの家にこのように語りイスラエルの人々に告げなさい。あなたたちは見たわたしがエジプト人にしたこと また、あなたたちを鷲の翼に乗せてわたしのもとに連れて来たことを。今、もしわたしの声に聞き従いわたしの契約を守るならばあなたたちはすべての民の間にあってわたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 5 章 6-11 節）

皆さん、実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

福音朗読（マタイよる福音書 9 章 36～10 章 8 節）

　また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

　イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。

「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　梅雨の中休みらしきいい天気が続いていますね。この時期は一年で最も日が長くなる頃です。おかげで幼稚園の畑でもトマトが青く大きくなり始めました。ぶどう棚でも 20 房ほどのぶどうがぶら下がっています。今年は肥料をたくさんあげたのできっとおいしいぶどうになるでしょう。

　さて、今日のミサの朗読はいったい何を私たちに呼びかけているのでしょうか。一つは神は私たちをご自分の民として選ぼうとされていること、そして二つ目は、その中から神の望みを実現するために人を選ばれるということでしょうか。神の国のためには私たちの協力も必要なのですね。

第一朗読（出エジプト記　19 章 2-6a 節）

主なる神はモーセとイスラエルの人々に対し語り掛けて言われます。「あなたたちは見た・・」と。「見た」ことは人の記憶に残り、人はその意味を解こうとします。モーセとイスラエルの人々にとって、神の体験はとても強烈だったでしょう。その記憶の体験として旧約聖書があるのです。その体験はその後、人々に語り継がれてイスラエルの人々の精神を形作っていきます。神はイスラエルの人々を通して、世の人々すべてに対して「あなたたちは私の宝となる」と宣言されるのです。アブラハムから始まるイスラエルの歴史は私たちを神の国に導きいれる歴史でもあるのです。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 5 章 6-11 節）

パウロはイスラエルの歴史すなわち神の救いの歴史に詳しい人物でしたから、キリストと出会ってから開眼して、イエス・キリストの生涯の意味を私たちに説き聞かせてくれています。「イエス・キリストが私たちのために死んでくださったことにより」神はイエス・キリストを通して一層強く私たちに対する神の愛を示してくださったのです。モーセや預言者たちは何度もイスラエルの反逆に対する神の怒りから救われるために取りなしをしてきましたが、今やキリストの一度の十字架の死によって神との和解が成立したのです。それで「私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を誇りとしています」とパウロは宣言するのです。

福音朗読（マタイよる福音書 9 章 36～10 章 8 節）

「飼い主のいない羊のような」群衆を前に、イエスは慈しみの心を呼び覚まされました。イエスは神の独り子として、また人となられた方としての人間性により、群衆を前にその心を揺さぶられたのです。そしてご自分のそばに置く弟子たちを選び、ご自分が持っている力を分け与えられます。イエスそのものが神の慈しみの現れである上に、ごく普通の人をご自分の片腕として選ばれたのです。現在の私たちを見回しても、失礼ですが、ごく普通の

人たちです。私たち一人ひとりはイエスから呼ばれた存在です。洗礼の恵みを受けるとき私たちは自分の救霊のために受けたでしょう。それはそうですが、神はイエスを通して神の国を作り上げるために私たちを選ばれたのです。「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」と私たちを激励されています。この神の選びの恵みは自分のためだけでなく、より多くの人々のために惜しみなく注がれなければならないのです。

このアジサイの花も神の慈しみを表すために咲いている。（2021 年 6 月）

P.S.

今年の六月は雨の日と晴れの日が意外とはっきりしていますね。気持ちはどっちかにしてくれと言いたいところですが、季節の変わり目はこんな調子で少しずつ変わっていくのでしょう。日本の自然はそんなものですが、最近は急激な変化が多いように思いますね。気をつけましょう。お体大切に。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光